

スマホネイティブ世代に必要なパソコン教育について（その3）

川喜田 多佳子

高田短期大学キャリア育成学科

寺家 尚美

三重県立津高等技術学校 OA 事務科

1. はじめに

スマホネイティブ世代に必要なパソコン教育について、その1、その2では、スマホネイティブ世代である学生が抱える課題とその問題解決方法について探ってきた。スマホネイティブ世代の学生は、日常ではほとんどパソコンを使っていない。情報検索や他人とのコミュニケーション、動画や音楽の視聴、ネットショッピングといったこれまでパソコンで行われていたことをすべてスマートフォンで行ってしまう。また、文字入力もキーボードよりフリック入力が得意である。スマートフォンがあれば特に困ることはないと考えている。

プライベートではスマートフォンで十分かもしれないが、企業ではパソコンを使って書類作成という作業が必須となる。社会人になった直後からキーボード入力、Word や Excel での書類作成という即戦力のスキルが問われることになる。即戦力として活躍するために大切なことは、学生のうちからパソコンに慣れ親しみ、実践的な課題をたくさんこなし、経験値をあげることだと考える。また、指示された内容を単純に行うだけではなく、自ら考え、創造する力をつけることも大事である。SNS になれたスマホネイティブ世代の学生が持つ、手軽に、簡単に、時間をかけずにできればいいという意識に対し、社会人としての自ら考え、責任をもってやらなければいけないという意識付けへ変えていく指導を行う必要がある。

本学キャリア育成学科オフィスワークコースでは、企業の即戦力となる人材を育成している。入学時パソコンスキルが高くない学生も多いため、タッチタイピングや機能学習による基礎固めを実施している。年3回検定を学内で実施しているため、上級資格取得を目指した指導も行っている。卒業後社会に出て働き始めた直後から即戦力となるためには、基礎だけでは不十分である。基礎を固めた上で応用力を養うことも必要である。このため、1年次後期授業では、自ら調べ創造しながら取り組む資料作成力の強化など、学生がパソコンを学ぶことの重要さとその意義の理解に努めてきた。

本年度1年次後期授業「ビジネス情報演習Ⅱ」は、将来仕事で活用できると考える創造的演習を多く取り入れた。また、授業内で学生のパソコンとスマートフォンの使用状況を把握するため、いくつかのアンケートをとった。アンケートから見えてきたもの、授業で実践した取り組みから見えてきたものをその3としてまとめ報告する。

2. 現状

本学学生の特長は、タイピングに取り組む姿勢である。授業の空き時間などにはPC教室でタイピングソフトの美佳タイプを使って熱心に取り組んでいる。本学の傾向として学生がはじめて受験する7月のワープロ検定合格率については全体を上回るが12月、2月の合格率は大幅に下降する傾向がある(図1)。

Word活用の仕上げとなる1年後期授業、「文書情報演習Ⅱ」では検定対策のみならず複雑な表作成からなる文書作成や、長文編集などのビジネス文書作成の

課題を課しているが、実際に提出されてくる課題には熱意が感じられないものが多い。タイピングソフトや検定問題での計測には熱心に取り組むが、先の見えない課題となると未完成のまま提出されるファイルも少なくない。また、誤字脱字も多く最終版とは思えない完成度の低い物が提出されてくる。それらの原因としてパソコンに向かって作業を進めていく根気がないことが考えられる。スマートフォンのような片手での短文入力と違い、黙々とキーボードを叩きながら聞き慣れない用語を扱う書類作成を自力で進めることができず、提出期限が来たためそのまま提出しているのであろう。

また、オフィスワークコースでは入学前に「正しいタッチタイピング講座」を行っているが、本年度の講座ではほんの数分で何もなくなってしまいう生徒が目立った。本学学生からも「パソコンキーボードよりスマートフォン入力の方が早く、手元を全く見なくても文字が打てる」という声まで聞こえるようになってきた。スマホネイティブ世代のスマートフォンスキルは利用時間の長さから驚くほど高くなっており、このことがパソコン離れをさらに助長する原因となっている。

3. 取り組み内容について

キャリア育成学科オフィスワークコース1年次の後期授業「ビジネス情報演習Ⅱ」では、将来仕事で活用できると考える課題を多く与えている。様々な場面を想定した課題を通して、構成や計算式を自ら考えて作成する表の設計能力と、Excelで集計、分析した結果を報告書としてまとめ上げる力を養うことを目標としている。Excelを中心とした授業ではあるが、仕事ではExcelのみを使用することはないことから、Excel、Word、PowerPointを連携して使用することを想定した内容とした(表1)。この授業は発展授業であることから、前期のよう

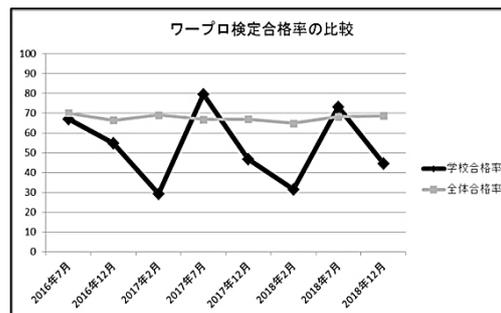


図1 本学と全体の合格率の比較

表1 「ビジネス情報演習Ⅱ」で実施した課題

課題	内容	目標
1 自己評価チェックシート作成	チェックシートに自分のExcelの習熟度について入力し、その結果を集計、レーダーチャートのグラフ作成を行い、自己評価を分析する。	Excelのスキルチェックシートを使って、自分の習熟度を確認し、その結果を報告書としてまとめることができる。
2 注文表作成	リカーショップで勤務しているという仮定で、期間限定の飲料品を販売するためのチラシと注文表を作成する。	1本の値段は変わらないという前提で、いかに顧客の購買意欲をそそる組み合わせなどを自分で考えることができ、見やすい注文表が作成できる。
3 アンケート調査の集計	ある商品の購入者向けにアンケートを実施し、そのアンケート結果をExcelに入力、集計し、報告書をまとめる。	アンケートで収集したデータをどのように入力し、どのように集計、解析すればよいかを考える。また、その集計結果を報告書としてまとめることができる。
4 スケジュール表作成	年間スケジュール表を作成し、個人の予定が管理しやすい表の設計をする。	特定の日時への自動書式設定方法を考え、スケジュールを確実に管理できる表を作成することができる。
5 請求書作成	上司から指示を受けたという仮定で、請求書のテンプレートを作成する。	「顧客データ」「売上データ」「商品データ」をもとにデータが効率よく、ミスなく入力できる請求書の設計を考え、上司の要望を取り入れた請求書を作成することができる。
6 家計簿作成	上司から指示を受けたという仮定で、家計簿の設計を行う。	必要な勘定科目を自分で調べ、前月からの繰り越し、入出金などの計算式を考え、上司の要望を取り入れた4か月分の家計簿作成と3か月分のデータ入力を行うことができる。

に模範操作を提示しながら説明することは必要最低限とし、自分で考えさせることを重視した。わからないことは、自分で調べたり、教員に聞いたり、学生同士で相談し合いながら課題を完成させることで、受け身ではなく自ら取り組む

姿勢を養わせた。また、課題の提出期限を厳守させるため、締め切り時間になったら提出フォルダを引き上げた。これは、ビジネスでは時間厳守は当然であることから、期限の重要性を理解させ、期限を守れるように計画的に取り組むという意識が持てるようになることを狙いとしている。

また、授業の最終課題は、グループワークとし、アンケート調査と発表を実施した（表 2）。会社では仲の良いもの同士で仕事することは不可能であることから、無作為に 5 名または 6 名にグループ分けを行った。普段あまり話をしたことがない学生同士が同じグループになったところも見受けられ、いかに協力して課題を作り上げることができるかが問われることとなった。アンケートの内容決定に悩むグループや授業を休む学生がデータを持っていて授業内で作業ができなくなってしまったグループなどが見られた。悩んだり失敗することで学びを得ることもできる。教員はあまり口出しをせず、学生が主体的に考え、実行できるよう誘導するアドバイス程度にとどめた。

表 2 グループワーク アンケートの調査と発表

1回目	12月11日	仮説検証型アンケートの内容検討、役割分担など
2回目	12月18日	アンケート用紙の作成と配付
3回目	1月8日	アンケート結果の集計
4回目	1月15日	発表用資料作成
5回目	1月22日	発表

4. 課題の成果

授業の最後に実施したアンケートで、一番難しかった課題を聞いたところ、「アンケート調査の集計」が最も多かった（図 2）。この課題は、商品の購入者に回答してもらったアンケート用紙のデータ 20 件分を Excel に入力し、そのデータを集計し、グラフ化を行い、その分析結果を Word で報告書としてまとめ上げるというものである。データ入力から報告書作成までの一連の流れをすべて実施するため、ボリュームのある課題であった。どのように集計すればよいか、また数値をグラフ化する際の最適なグラフの種類は何か、集計結果から導き出されたものは何かなど、調べたり考えたりすることが多かったため、多くの学生が難しいと感じたようである。

また、一番役に立つと感じた課題については、「請求書作成」や「アンケート調査の集計」という意見が多くみられた（図 3）。請求書作成は、企業活動の中で必須のものであるため、自分で考えながら作成したことで、役に立つと感じた学生が多

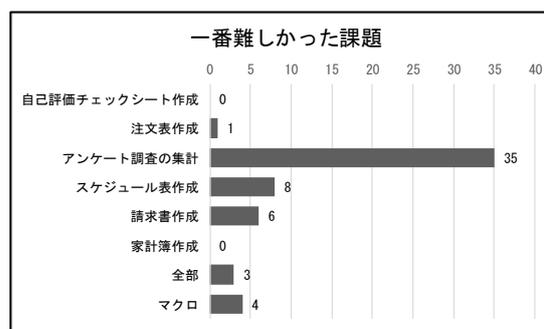


図 2 難しいと感じた課題

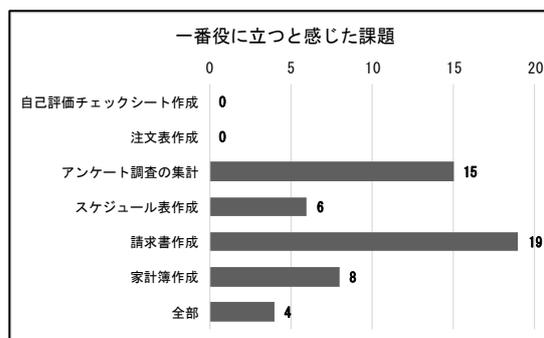


図 3 役に立つと感じた課題

かったと考える。アンケート調査の集計は、多くの学生が一番難しかった課題に挙げているため、難しい課題を完成させたことで達成感があり、スキルアップができたと感じた結果ではないかと思われる。授業に対する感想については、やはり「難しかった」と回答した学生がほとんどであった。しかし、「将来役に立つと思う」、「勉強になった」という感想も多かったことから、この授業の狙いを学生が理解し、成果を上げることができたと考える。また、「課題提出に遅れないように頑張ることでパソコンを触る、開く癖ができました」という意見もあり、ノートパソコンの活用にもつながったようである（表3）。

最終課題であるグループワークでは、アンケート調査の課題自体に苦勞した学生も多いが、グループ内のコミュニケーションに苦勞したと答えた学生が多くみられた。社会に出れば、職場内で協力して仕事を行うことから、複数人で実践するグループワークの経験は非常に大切である。役割を分担して課題を進め、1つの成果物を完成させることの難しさや、グループワークではコミュニケーションが重要であるということを理解できた結果と考える。また、難しい課題をやり遂げたことで達成感を得られた、自分では思いつかないような考えを出し合えるというグループワークの良い点を発見できたという感想もあり、社会に出た後の職場を意識できたのではないかと考える（表4）。

5. アンケート調査の結果

平成31年1月、本学キャリア育成学科オフィスワークコース1年生を対象に、ノートパソコンとスマートフォンに対する使用状況に関するアンケートを行った。（回答者53名）。この中で、ノートパソコンとスマートフォンの使用頻度はどちらが高いかという質問に対し、92%の学生がスマートフォンと答え、残り8%の学生がノートパソコンであると答えた（図4）。パソコンとスマートフォンの使い分けはどのように行っているかという質問に対しては、授業の課題作成はパソコン、それ以外はスマートフォンという回答が多く見られた。配布したノートパソコンの使用目的については、動画視聴という回答が多かった。大画面で動画を見たいときにノートパソコンを利用しているということである。次いで多かった回答は情報検索であり、こちらも大画面で検索したいときに利用しているということのようである。

表3 授業のおもな感想

- ・ 難しくも楽しかった。
- ・ 課題多く、難しかった。その分成長できた。
- ・ それぞれの課題からいろんな機能が知れたり、どのような機能を使えばうまくまとめられるかなど、いろんなことが学べた。
- ・ 先生や友人に聞いて作成でき、達成感があった。
- ・ 全部難しかったけど、友達と協力して何とかできた。Excelにだいぶ慣れた。
- ・ 課題が多く大変だった。遅れないように頑張ることでパソコンを触る、開く癖ができました。
- ・ 仕事や普段の生活で活用できるものだったのでとても勉強になった。
- ・ 難易度が高く友達と協力しながらやってきたがとても大変だった。将来の為に思い頑張った。
- ・ 覚えやすいものから難しいものもあった。どの機能も将来役に立つと思った。

表4 グループワークのおもな感想

- ・ 自分一人で物事を進めてしまったので、周りと話をすればよかった。
- ・ みんな最初から最後までがんばってくれて発表までに間に合わせる事ができた。みんなの意見をきいてまとめる難しさがよくわかった。
- ・ いろいろな意見が出てきてよかった。会社に入ったらプレゼンをする事もあると思うので、グループでできたのはいい経験になった。
- ・ 1人が休むと全体に迷惑がかかる。いろんなアイデアが出るのいい。いかにわかりやすく人に伝えるかが大事ということが分かった。
- ・ 早く早めに作業を進めていくことが大事だと思った。
- ・ よくできているグループがたくさんあってそれを今後何かに参考にできたらと思う。
- ・ あまり話したことの無い人たちのグループだったのでテーマ決めや役割分担に時間がかかった。コミュニケーション能力やリーダーシップが必要な課題だと思った。
- ・ 大人数でパワーポイントやExcelを作ることがなかったので、難しかったがすごく良い機会だった。
- ・ みんなで1つのことに取り組んだことで交流が深まった。出来上がった時の達成感がうれしかった。

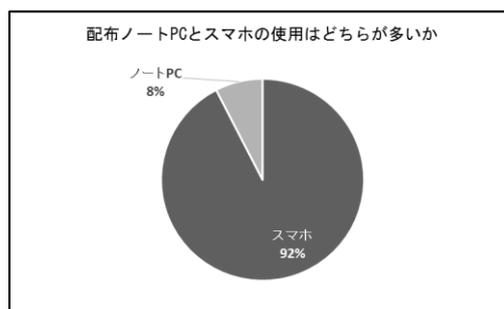


図4 使用頻度の割合

6. アンケート調査からの考察

学生のパソコン使用状況は、課題作成や大画面を利用した動画視聴であり、普段は小さくて持ち運びに便利なスマートフォンを使用しているという現状であることがわかった。使用ソフトの関係もあるが、課題作成などの学業にはパソコン、他人との連絡などのプライベートはスマートフォンという使い分けの意識付けはできつつあると考える。この使い分けが、仕事ではパソコンが有用であるという意識につながっていきけるのではないかと考える。しかし、課題作成に何を使ってもよいなら何を使用するかという質問に対し、25%の学生からスマートフォンでやりたいという意見もあることから、さらにパソコンの有用性を理解させる取り組みをしていく必要がある(図5)。また、課題作成以外のパソコン使用状況は、大半の学生が動画視聴であることから、パソコンの活用方法やセキュリティについてなど、様々な演習を通じてさらに理解させる必要があると感じた。

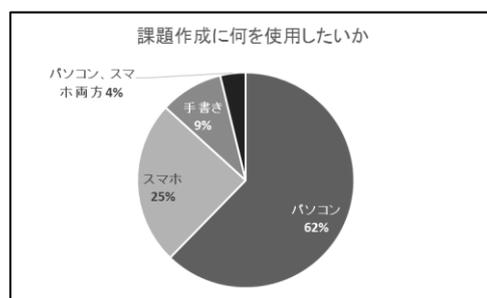


図5 課題作成で使用したい機器

しかしながら、アンケート結果にある「多くの課題を課されたことによりパソコンを触り、開く癖がついた」と学生自身が感じたことは、筆者がその1, その2でねらい、実践報告してきたことに対しての成果の表れであると考えられる。

7. 今後の課題

本学卒業生から聞かれる声としては、授業で学んだパソコンスキルは会社で役に立ったとの声が多く聞かれることから、今後もビジネスでの様々な活用場面を想定した授業展開を実施していきたいと考える。就職先でITリーダーとして活躍できる人材を育成するカリキュラムも取り入れていきたい。筆者が企画・運営をする本センター就業支援セミナーでは、社会人の方にも通用する、高度な指導技術と所作を持ち合わせた学生たちが主体的に運営できるようになることを期待している。

ICT技術の進化はめまぐるしい。常に新しい知識や技術を提供し続ける必要がある。大学や専門学校で特殊な専門知識を身につけてもそれ自体が陳腐化してしまう。筆者が行っている授業の根底にあるものは、ビジネス実務能力の向上であり、どの業界でも通用する能力を持つ社会人の育成である。時代の流れも意識しつつ、学生のニーズやレベルに重点を置いた授業カリキュラムの構築を継続することが重要と考える。地元の事業所の方々に「高田短期大学の学生でなければ」と言っただけの人を育てていきたい。

参考文献

- ・川喜田多佳子、寺家尚美 (2017) スマホネイティブ世代に必要なパソコン教育について キャリア研究センター紀要・年報 P85～P88
- ・川喜田多佳子、寺家尚美 (2018) スマホネイティブ世代に必要なパソコン教育について (その2) キャリア研究センター紀要・年報 P55～P59